オリンピック放送の「役割語」

―外国人選手インタビューの翻訳字幕から―

太田眞希恵（NHKラジオセンター）

1. はじめに

本研究では，北京オリンピック（2008年）とリオデジャネイロオリンピック（2016年）のテレビ放送に出た外国人選手インタビューが，どのような日本語に翻訳されたかについて「役割語」という観点を導入して分析した．分析の対象としたのは，外国人選手のインタビューに付けられた翻訳字幕（テロップ）．役割語が使われるのはどのようなときなのかについて分析するとともに，ノンフィクションの分野であるオリンピック放送に役割語が出現する理由について考察した．

2. 「役割語」の定義と，オリンピック放送・翻訳字幕を分析する際の着目点

「ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢，性別，職業，階層，時代，容姿・風貌，性格等）を思い浮かべることができるとき，あるいはある特定の人物像を提示されると，その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき，その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ．」

金水(2003)の以上の定義にもとづき，本研究では，文末表現と１人称代名詞に着目して，翻訳字幕を分析していった．

3. オリンピック放送に「役割語」が出るパターン

オリンピック放送の翻訳字幕に「役割語」が出現する人物像とその使い方には，いくつかのパターンがあることがわかった．

- スーパースター（男性・女性）の発話
  例）ウサイン・ボルト選手やマイケル・フェルプス選手　→男性語，　エレーナ・イシンバエワ選手　→女性語
- ライバル選手の発話　　例）北島康介選手の“ライバル”ダーレオーエン選手　→男性語
- 濃いキャラクター性をもつ選手の発話
- 競技者としては恵まれた立場にない選手の発話　　→です・ます体
- “興奮”や“感情”が表れた発話　　→「さ」「ね」「よ」「わ」などの終助詞の付加

4. オリンピック放送に「役割語」が出現する理由　～日本人選手を主人公とした「物語」～

オリンピック放送については，メディア研究（とりわけメディアスポーツ研究）の分野で，これまでさまざまな研究がなされてきた．その知見をふまえ「オリンピック放送は“日本人選手を主人公とした「物語」”である」という視点をもって考察していくと，オリンピック放送の外国人選手インタビューの翻訳に「役割語」が出現しやすい理由がみえてくる．

- オリンピック放送は日本人選手を「主人公」とした“応援放送”である
  →オリンピック放送は，自国・日本の勝ち負けやメダル獲得の情報に偏りすぎで“応援放送”と化しているという指摘がある．外国人選手たちは「主人公」（＝日本人選手）を取り巻く人物として登場することとなり，その発話には，その“人物像”にふさわしい「役割語」が使われることになる．
- スポーツ放送やオリンピック放送の「物語」性
  →テレビのスポーツ放送やオリンピック放送（特にスポーツドキュメンタリー）には，「物語」が織り込まれていると指摘されてきた．すなわち，“登場人物”たちが一連の“ストーリー”をもった流れで構成され提示されているということで，これにより，スポーツに詳しくない人でもその「物語」を理解し，楽しみ，感動することができる．「役割語」は，その「物語」のもとで，「物語」をより効率よく理解できるように使われていると考えることができる．

参考文献

金水敏（2003）．〈もっと知りたい！日本語〉ヴァーチャル日本語 役割語の謎　岩波書店　　ほか